

やましんかわら版は
山新販売店と読者を結ぶ
ミニコミ紙です

やましんかわら版

発行部数 9万7,000部

毎月5日発行

新聞休刊日のため6月11日(月)付朝刊はお休みさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

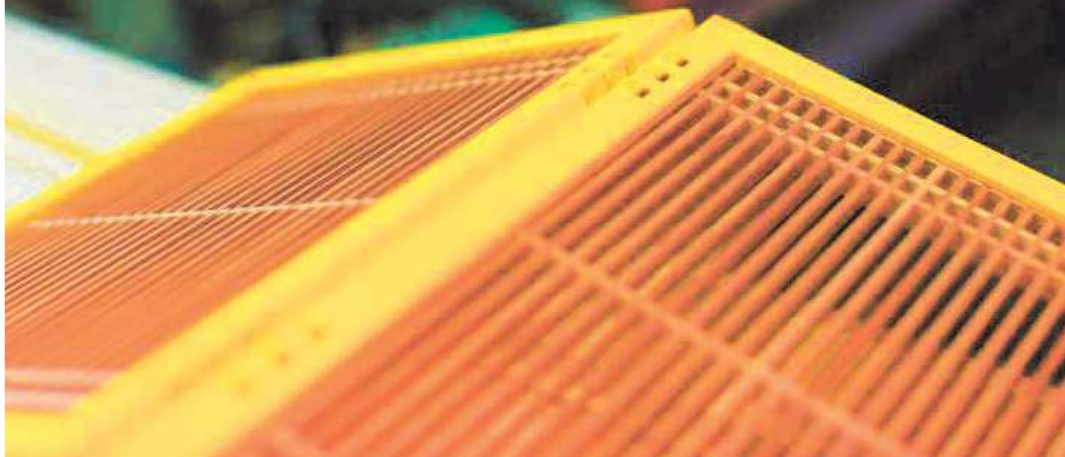


かわら版編集部

〒990-2323 山形市桜田東二丁目3-8-7
《ホームページ》 <http://www.yamashinhanbai.jp/>
《メール》 kawaraban@yamashinhanbai.jp
読者お問い合わせ窓口
TEL.023-635-6111 (山新販売内)

今月の
いちばん
情報!!

後世に残したい技術力、 建具職人が手がける 紐蝶番。



モンテディオ山形を
応援しよう!!
ホームゲーム日程

会場/NDソフトスタジアム山形

節	対戦カードと日時
第18節	6/10(日)14:00 ジェフユナイテッド千葉 <small>チケット販売中</small>
第20節	6/23(土)19:00 徳島ヴォルティス <small>チケット販売中</small>
第21節	6/30(土)19:00 FC岐阜 <small>チケット販売中</small>

左右計6箇所穴の、紐によって構成される紐蝶番。前後双方向に折りたため、また木の色の組み合わせも楽しめます。

戸口や襖、窓周りなど、かつて日本家屋には、木製の建具が多く使用されていました。近代に入り、アルミサッシなど高性能な金属製建具の登場により、徐々にその数は減ってきましたが、建具職人の技によって生み出されるそれは、今もなお多くの人々から支持されています。山形市在住の建具職人、船越功弘さんの工房を訪ね、その技術のひとつである『紐蝶番(ひもちょうばん)』についてお話しいたします。

Q、「紐蝶番」とは。

▶それは茶道の席に欠かせない道具『風炉先屏風(ふうろさきびょうぶ)』に用いられるなど、対となる2枚の扇を、金属ではなく紐の蝶番(ちょうつがい)で合わせる技術です。屏風は飛鳥時代に中国から伝わりましたが、当初は革紐がつなぎ役として使われていたそうです。時間の経過とともに汎用性と耐久性を兼ね備えた紐や和紙、また、頑丈な金属の蝶番が開発されていきました。私もこの技術を知りませんでした。25年ほど前に建具の名工であり、お茶の世界にも精通していた知人

より学び受けました。

紐蝶番は、一般的な金属の蝶番と比べ軽く、また前後の双方向に折りたためることが一番の特徴です。私としては紐の色や素材を変えられるところに、魅力と美しさを感じています。ただ、素材が紐ゆえに耐久性などが理由で、用途が限定されてしまうという難点もあります。

Q、技術的難易度は高い?

▶紐を通す穴の角度や配置、また、紐自体の長さなど、よくよく設計された技術なので見様見真似でできるものではありません。本体である扇も狂いなく組み立てなければならぬので、職人の総合的な力量が問われます。

私も高齢になったので、そろそろこの技術を次の世代へと考えているのですが、時代とともに住宅の様式などが変わったことで、建具職人もだいぶ減り、なかなか後継者に会えずにいます。ただ、古くから伝わる技術ですので、なんとか後世に残したいものです。最近になり、紐蝶番の技術をいかし、黒柿など銘木と呼ばれる木材を使った両面開きのフォトフレームなど、面白い依頼が来

ています。私としてはできあがった製品が、紐蝶番という技術をより多くの方に知っていただく機会になればと思っています。

Q、建具職人は天職ですか。

▶昭和33年。私は中学卒業と同時に、今でいう職業訓練所に入りました。1年後に職人の弟子として働き始め、1ヶ月300円の給与からのスタートでした。その頃は、仕事は目で盗めという時代でしたから、それなりの苦労はありましたよ。でも、おかげで今の年齢になっても大好きな建具の仕事が続けられ、充実した日々を送れています。いつの時代にもいろいろなる変化はつきものですが、良いもの、良い技術の価値は変わらないはず。これからは技術の継承を念頭に、建具職人として仕事を全うしていきたいですね。



左/船越さんが手がけた『風炉先屏風』。金具を一切使わない、建具職人の技術に脱帽です。

右/半世紀近く、建具に携わる船越さん。現在工房では、その技術を受け継いでくれる職人を探しているとのこと。志ある方はぜひ。



船越建具工房

住所/山形市上桜田1-10-16
電話/023-632-1358